

2 中金堂の歴史

(1) 中金堂の創建

『興福寺流記』(以下『流記』と称する)によれば、興福寺は、藤原鎌足の妻の鏡女王が、鎌足の病氣平癒を願い建立した山階寺を濫觴とし、都の移転に伴い飛鳥に遷り厩坂寺と号し、平城遷都に及んで現在の地に遷り興福寺と号したものである。しかし、山階寺・厩坂寺ともに、『日本書紀』には見えない。また『続日本紀』(以下『続紀』と称する)には、四大寺と呼ばれる大安寺・薬師寺・元興寺・興福寺のうち、興福寺以外の三寺については、若干の問題も含むものの、飛鳥・藤原地域からの移転の記載があるのに対し、興福寺の創建についての記載はない。『続紀』養老4(720)年10月丙申条に「始置養民・造器及造興福寺仏殿三司」とあるのが正史における興福寺の初見である。したがって、『流記』の信憑性と、『続紀』との整合が問題となる。なお、『流記』には中金堂そのものの創建については記載がないが、中金堂の記載に上記の興福寺の縁起をかけることから、中金堂の創建=興福寺の創建と考えて差し支えない。

まず、『流記』の信憑性について。『流記』は平安時代後期成立だが、「天平記」「宝字記」「延暦記」等の年号を冠した各時代の資財帳を引用し、その史料的性格は「資財帳の集大成」といえる(渋谷和貴子『興福寺流記』について『仏教芸術』160、1985)ので、『流記』の資財帳からの引用には信頼を置くことができる。前述の興福寺の由緒と創建は資財帳からの引用部分であり、奈良時代に、興福寺が山階寺・厩坂寺と移転してきた起源を持ち、平城遷都間もない時期に創建された、とされていたことは確かである。氏族寺院で正史に記載されるものはほとんどないことからしても、『流記』の述べる由緒は信頼できるであろう。

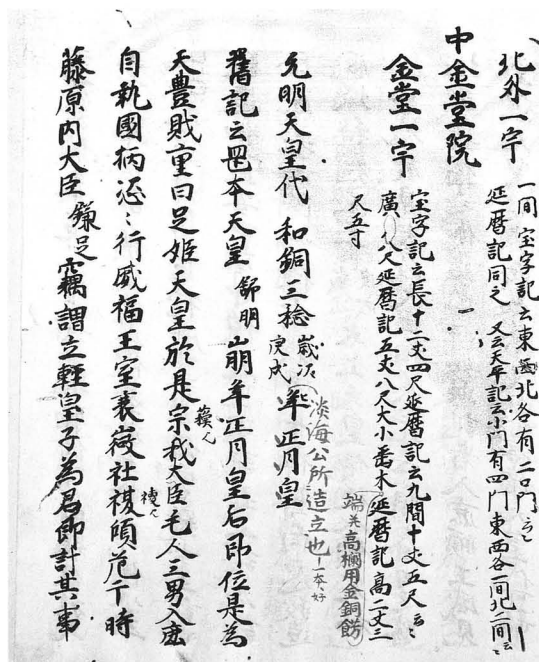
また、寺格や寺号に関連して、川原寺(弘福寺)とのつながりを見いだす見解(加藤優「興福寺と伝戒師招請」関晃先生古希記念会編『律令国家の構造』吉川弘文館、1989)も魅力的である。

創建の時期について、「仏殿」は通常金堂をさすとし、『続紀』の「造興福寺仏殿司」を中金堂造営官

司とみ、中金堂造営をこの時期まで遅らせる見解がある(藪中五百樹「奈良時代に於ける興福寺の造営と瓦」『南都仏教』64、1990)。『流記』の中金堂の記載には靈龜~養老年間成立とされる「旧記」の他、「宝字記」「弘仁記」の三書が引かれ、いずれにも養老年間については言及が無く、和銅年間の創建を語ることなどから、史料上は遷都直後の和銅年間創建とする、通説の妥当性が高いといえよう。

(2) 中金堂の被災と再建

興福寺中金堂院は、七度の火災に遭い、その度に再建されてきた(『興福寺 第1期境内整備事業にともなう発掘調査概報I』および第2表参照)。最初の被災である永承元年の火災と再建は、初めての再建で、かつ撰関政治衰退にともない、撰関家が藤原氏の精神的・信仰の支柱で



第2図 『興福寺流記』中金堂部分(興福寺蔵)

ある氏寺・興福寺を優遇するようになる時期と重なったこともあり、大規模な再建が行われた。当時の人々にも印象が強かったようで、再建工事のエピソードが『今昔物語集』に、春日社に奉じた願文が『朝野群載』におさめられている。再建の具体的な様子は『造興福寺記』に記載がある。『造興福寺記』永承三年三月一日条に、再建供養のための舞台舗設の記事があるが、その場所について「当_二仏面間_一。立_二礼盤_一脚_二。去_レ壇_一一許丈。去_レ

第2表 中金堂焼亡表

被災	再建供養
永承元年 (1046) 12月24日	永承3年 (1048) 3月2日
康平3年 (1060) 5月4日	治暦3年 (1067) 2月25日
嘉保3年 (1096) 9月25日	康和5年 (1103) 7月25日
治承4年 (1180) 12月28日	建久5年 (1194) 9月22日
建治3年 (1277) 7月26日	正安2年 (1300) 12月5日
嘉暦2年 (1327) 3月12日	応永6年 (1399) 3月11日
享保2年 (1717) 正月4日	文政2年 (1819) 9月25日

礼盤_二南_二許丈_一。構_二立_二舞台_一。南北四丈八尺。東西三丈八尺。在_二檻并南北階_一。各凡去_二金堂_一砌三尺。前十日木工寮所_二結構_一也。」とあり、基壇から約一丈の場所に礼盤があり、そこからさらに南に二丈の場所に舞台があり、舞台から三尺の所に「金堂^{みどり}砌」があったことが知られる。「金堂砌」は、基壇から二丈七尺（約8m）もしくは三丈三尺（約10m）にあったことになる。「砌」は通常雨落溝をさすと考えられるが、このように離れた雨落溝は考えがたい。そこで注目されるのが、前回の調査で確認した前庭部石敷SX7550の南端の見切石である。見切石の基壇からの距離は約8mで、「金堂砌」とよく一致する。このことから、SX7550は永承再建の際にはすでに存在していたことが明らかである。

その後、嘉保3年の火災後の再建時に讃岐国から基壇外装用の凝灰岩を取り寄せており、『後二条師通記』承徳3年3月3日条、これは同時期に京都でもしばしば用いられた「白色凝灰岩」であろう。確実にこの時期まで、基壇外装は凝灰岩切石を用いた壇正積であった（遠藤亮氏の御教示による）。

一般に興福寺は再建の際に旧規をよく伝えるが、中金堂についても同様で、平家の南都焼討後の再建時も、東大寺が中国からの新手法を取り入れたのに対し、興福寺は旧来の形態を守ったとみられ、室町時代再建の中金堂も古代的な形態を良く伝えている。ただし享保の火災の後、文政の再建の際には財政難などから、一回り小さい仮金堂の建設が行われた。近世の興福寺で注目されるのは南円堂の観音信仰で、現在境内に立つ石灯籠が、多く近世の銘を持ち、かついずれも南円堂への参道の石灯籠として立ち、中金堂を正面としていないことは、中金堂とともに被災した南円堂の復興が素早かったことと相俟って、信仰の形態を表し興味深い。

(3) 廃仏毀釈と復興

明治維新に際し、興福寺は全山復飾を願い出し、僧侶は春日社の宮司となった。明治5年に廃寺・寺地は官有地・さらに公園地となった。廃仏毀釈の時勢の中、塀や子院は破却され、主要な堂舎も学校や役所に転用され、中金堂も中教院等に転用された。転用時の改造で床が張られ、明治7年に床張りの障害になる須弥壇が取り壊された。この取り壊し工事の時に奈良時代の鎮壇具が出土し、国の所有となって現在東京国立博物館に蔵されている。その後明治14年に興福寺寺号復活が認められ、中金堂の仏堂への復興工事が行われた。こうした工事中の明治17年に、再び鎮壇具が出土し、興福寺に所蔵されている。

寺号復活時には敷地は公園地のままとされたが、後に返却された。ただし、塀等が破壊されているため、区画施設が乏しく、奈良公園と一体の状況である。破壊を免れた堂舎は、解体修理等を経ながら維持され、中金堂も基壇や須弥壇の改修が行われた。南円堂の観音信仰は今日に至るまで盛んである。